阪田蓉子先生と図書館史研究・日本図書館文化史研究会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学司書・司書教諭課程 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小黒, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7211

〈退職記念特集〉

阪田蓉子先生と図書館史研究・日本図書館文化史研究会

作新学院大学　人間文化学部
小　黒　浩　司

はじめに

『明治大学司書・司書教諭課程年報』2008年度号を阪田先生の退職記念号として発行するので、日本図書館文化史研究会における先生のご活動内容、先生の図書館史研究等について、執筆するようにとのご用命を頂戴した。そこで僭越ではあるが、先生の図書館史研究上のご業績と、日本図書館文化史研究会とのかかわりについて、一文を寄せる次第である。

阪田先生の図書館史研究

阪田先生は、多くの教育・研究業績をお持ちの方であるが、歴史研究に属する主要な業績としては、次のようなものが挙げられる。

① 「私立大学図書館協会の成立と戦前の私立大学図書館」『大学図書館研究』22号, 1983.5, p.117-133.

② 「W.C.Berwick Sayersと児童図書館/(追補)」(現代の図書館学<特集>)『図書館学会年報』30(4)/31(1), 1984.12/1985.3, p.186-193./p.45-46.

③ 「帝国大学附属図書館協議会の活動」『図書館学会年報』33(3), 1987.9, p.111-121.

④ 「大学中央図書館における対学生サービスの史的変遷：貸出と開架（上・下)」『図書館学会年報』34(4)/35(1), 1988.12/1989.8, p.178-184./p.18-35.

⑤ 「大学図書館基準（1952）制定過程」『図書館史研究』6号, 1989.10, p.31-71.

⑥ 「明治期の高等教育政策と東京帝国大学附属図書館」『梅花女子大学文学部紀要. 人文・社会・自然科学編』26号, 1991.12, p.47-74.

⑦ 「わが国の大学図書館におけるレファレンス・サービスの発展」三浦逸雄，朝比奈大作編『現代レファレンス・サービスの諸相』日外アソシエーツ, 1993.3, p.105-130.

⑧ 「大正期の高等教育政策と東京帝国大学附属図書館」『梅花女子大学文学部紀要. 人文・社会・自然科学編』28号, 1993.12, p.101-122.

⑨ 「大学令と明治大学図書館」梅花女子大学紀要委員会編『梅花女子大学開学三十周年記念論文集』梅花女子大学, 1995.3, p.123-136.

⑩ 「大学昇格と同志社大学図書館」石井敦先生古稀記念論集刊行会編『転換期における図書館の課題と歴史：石井敦先生古稀記念論集』緑蔭書房, 1995.9, p.239-250.

図書館学はその研究対象が図書館というハコであり、図書館資料というモノである。昨今では、図書館情報学と称するようになり、情報学を付加することで、「数字」を問う傾向が強くなっている。技術中心、人間不在の学問分野とも言えなくはない。

だが「阪田図書館学」は、図書館を通じて人間を考究する。利用者に対するサービスという視点から、図書館の意義を真正面から問うてきた。阪田先生の研究には、人間が、人間の心が存在する。

阪田先生の主たる研究領域は大学図書館である。上記ご業績のリストからわかるように、これまで一貫して、大学図書館を歴史的に追究してこられた。

前述のように、図書館情報学研究はハコ・モノを中心とする傾向が強い。大学図書館研究も同様で、近年では情報システムや検索といった分野の研究がさかんである。大学図書館史研究も、大学図書館という館（やかた）の歴史や蔵書構築の歴史の研究が主流を占めていた。

しかし阪田先生は、サービスの変遷過程をたどるという斬新な切り口で、大学図書館を考察した。従来の研究にはみられない観点から、大学図書館を歴史的に検証したのである。

阪田先生は、大学図書館を利用者サービスの面から捉えた。利用者の中心は学生である。先生は学生を主体として見、大学のなかにおける大学図書館の役割について探究した。

阪田先生の研究はまた、大学の理念、大学教育の理念を、大学図書館から問い直そうというものであった。大学図書館の意義を根源に立ち返って考えるという、巨視的な研究である。図書館情報学研究の最高峰に位置する、画期的な研究といっても過言ではない。

「大学図書館は大学の心臓である」という。だがハーバード大学学長エリオット（1869～1909年在任）の言葉を、真に理解している大学関係者はどれ程いるだろうか。先生が提示された研究の視点は、今なお色あせていない。

阪田先生と日本図書館文化史研究会

日本図書館文化史研究会（以下研究会と略称）は、図書館史研究会という名称で、1982年12月に発足した。阪田先生は設立の賛同者として、第1回研究大会に参加されている。

研究会は、発足を呼びかけた方々が先導して活動を開始したが、実際の運営は阪田先生をはじめとした「実働部隊」が当たった。先生は運営委員に選任され、設立当初から研究会運営の実務を担った。つまり先生はこの研究会の生みの親でもあり、育ての親でもある。

阪田先生は創業期の運営委員として、大会・セミナー検討委員会の一員となり活躍された。図書館史セミナー、研究大会・総会などの企画や研究大会での司会など、研究会の運営に力を尽くされた。1984年4月にICUから梅花女子大学に転じられ、以後は研究会の関西地区の中心的な役割を担われた。

1986年1月から1989年3月までの約3年間、阪田先生は事務局を担当された。この時期の研究会は、「創業は易く守成は難し」の格言のとおり、創立の熱気が一段落し、その活動に若干の停滞が生じていた。先生はいわば「火中の栗」を拾ったことになる。

事務局の仕事は、あらゆる研究会運営の「雑務」を受け持つ。現在は電子メールやインターネットといった便利な道具があり、負担は軽減された。しかし阪田先生が事務局長在任当時は、運営委員間での連絡にも、相当のご苦労があったことは想像に難くない。

阪田先生は、なぜこのような割に合わない役回りをお引き受けになったのであろうか？それは、図書館史研究の発展のためには、研究者同士の共同が重要であり、研究者と研究者をつなぐ組織が必要であることを強く認識しておられたからと思われる。

阪田先生は大学図書館関係団体に関する論文を発表されている（前掲ご業績のリスト①･③）。先生はこれらの論文において、図書館相互の協力関係が発展していく歴史的必然性を鮮やかに解明している。先生はこうしたご研究を通じて、人と人との絆、組織と組織の連携の大切さをよくご存知であった。それゆえ、研究会が困難に直面していたからこそ、あえて事務局長の任に就かれたのである。阪田先生の学問は、実践と深く結びついている。

以下は、この時期に阪田先生が研究会の機関誌等に執筆されたり、研究大会等でご発表されたもののリストである。先生が率先して研究会の活動を牽引されていたことがわかる。

- 「図書館史研究会の活動経過」『図書館史研究』3号, 1986.8, p.75-79.
- 「本会活動の記録」『図書館史研究』4号, 1987.9, p.109.
- 「本会活動の記録」『図書館史研究』5号, 1988.9, p.93.
- （口頭発表）「東京の私立大学図書館－全国の図書館に与えた影響」第5回図書館史を考えるセミナー（1987.9）
- （書評）「薄久代著『色のない地球儀』によせて」『ニューズレター』32号, 1988.7, p.14-17.

・（口頭発表）「大学中央図書館における学部学生のサービス」第6回図書館史を考えるセミナー（1988.9）

さて、前記のように研究会の創設から5年程経過した頃から、その活動にやや停頓が見られるようになった。この事態を打破するために、運営体制などの見直しが図られることになった。

1995年9月、会名を図書館史研究会から日本図書館文化史研究会に変更した。新たに制定した研究会の規約に基づいて代表を置き、初代代表に小川徹氏（当時法政大学）を選出した。機関誌名も『図書館史研究』を1996年度発行の13号から『図書館文化史研究』に変更し、投稿規定・執筆要領を整備した。

一連の改革が総仕上げの段階に至ったところで、阪田先生に第2代の代表就任をお願いすることになった。先生こそ新生研究会を象徴する存在として最適任の方であった。研究会の陣頭指揮に当たる代表に、阪田先生以外の人選は考えられなかった。阪田先生は、われわれの熱望に応じて1999年度から代表に就任された。先生のご指導の下、研究会の活動は活性化した。とくに先生が2001年4月に明治大学に転じ、明大が研究会の活動拠点のなったことで、その充実ぶりは顕著になった。2002年9月、研究会は日本学術会議の登録学術研究団体となった。

阪田先生の研究会代表としてのご活躍の模様を、限られた誌面で記すのは難しい。以下は、代表になられてから2008年末までに、先生が研究会の機関誌等に執筆されたり、研究大会等で発表されたもののリストである。先生の代表としてのお仕事の一端である。

・（口頭発表）「英国（イングランド）の最近の公共図書館事情」2000年度関東地区第3回研究例会（2001年3月　法政大学）
・「新体制の発足にあたって」『ニューズレター』80号, 2002.5, p.2.
・「序」/「司書養成と司書課程」『図書館文化史研究』19号, 2002.9, p.1-2./p.111-131.
・（シンポジウムパネリスト）「レファレンス・サービスと情報源」2003年度研究集会（2003.9）
・「図書館と文化史と研究会」『ニューズレター』92号, 2005.5, p.2-3.
・「『ニューズレター』100号記念－事務局長時代の思い出」『ニューズレター』100号, 2007.5, p.7.
・「被伝者の光と影－序にかえて」『図書館人物伝』日外アソシエーツ, 2007.9, p.3-4.
・（特別講演）「本間一夫と日本点字図書館」2008年度研究集会（2008.9）

おわりに

最後に一つだけ、阪田先生の研究会代表としてのエピソードを紹介したい。

2007年に研究会が創立25年を迎えることになり、その記念事業の一環として論文集の刊行が決まった。しかし論集のテーマについては、なかなか意見がまとまらなかった。最終的には阪田先生の「鶴の一声」で、人物評伝集とすることに決した。当初はどのくらい原稿が集まるか不明であったが、多くの応募があり、図書館を育てた内外20人の評伝を集めたA5判450ページの大部の書『図書館人物伝』を刊行することができた（日外アソシエーツ, 2007.9）。このことは先生のご判断の的確さを物語っている。

今振り返ってみると、阪田先生が人物評伝集を選択されたのは、当然のことであったと思われる。先生の学問の基調は「人間探求」なのである。ご自身にもセイヤーズに関するご研究がある（前掲ご業績のリスト②）。

ただ大変に残念なことがある。阪田先生は当初日本点字図書館の創立者本間一夫氏の評伝を、ご執筆の予定であった。しかしご多忙のため、これを断念されたのである。阪田先生には是非この評伝を完成させていただきたいと思う。人間愛に満ちた本間氏の生涯は、先生によって描かれるのが相応しい。

そして今後も引き続きわれわれ後進を叱咤激励していただきたいと思う。阪田先生の「人間くさい」研究は、いつまでもわれわれの大切な指標なのである。